# 第１３章

# ドゥルヴァ・マハーラージャの子孫の説明

## 第１節

*सूत उवाच*
निशम्य कौषारविणोपवर्णितं
ध्रुवस्य वैकुण्ठपदाधिरोहणम् ।
प्ररूढभावो भगवत्यधोक्षजे
प्रष्टुं पुनस्तं विदुरः प्रचक्रमे ॥ १ ॥

スータ　ウヴァーチャ
*sūta uvāca*

ニシャミャ　カウシャーラヴィノーパヴァルニタンム
*niśamya kauṣāraviṇopavarṇitaṁ*

ドゥルヴァッシャ　ヴァイクンタハ・パダーデヒィローハナンム
*dhruvasya vaikuṇṭha-padādhirohaṇam*

プラルーダハ・バハーヴォー　バハガヴァティ　アドホークシャジェー
*prarūḍha-bhāvo bhagavaty adhokṣaje*

プラシュトゥンム　プナス　タンム　ヴィドゥラハ　プラチャクラメー
*praṣṭuṁ punas taṁ viduraḥ pracakrame*

*sūtaḥ uvāca*—スータ・ゴースヴァーミーが言った; *niśamya*—聞いたあと; *kauṣāraviṇā*—聖者マイトゥレーヤによって; *upavarṇitam*—説明された; *dhruvasya*—ドゥルヴァ・マハーラージャの; *vaikuṇṭha-pada*—ヴィシュヌの住居に; *adhirohaṇam*—高められたこと; *prarūḍha*—増えた; *bhāvaḥ*—献愛奉仕への熱意; *bhagavati*—最高人格主神に; *adhokṣaje*—直接の視覚を超えた人物; *praṣṭum*—尋ねること; *punaḥ*—再び; *tam*—マイトゥレーヤに; *viduraḥ*—ヴィドゥラ; *pracakrame*—試みた。

**スータ・ゴースヴァーミーが、シャウナカを筆頭とするリシたちに語りつづけた。「ドゥルヴァ・マハーラージャが主ヴィシュヌの住居に高められたことをマイトゥレーヤ・リシから聞いたヴィドゥラは、献愛奉仕に対する思いを大いにつのらせ、つぎのようにマイトゥレーヤに尋ねた」**

## 要旨解説

ヴィドゥラとマイトゥレーヤの話題からも立証できるように、最高人格主神と献愛者の活動は私たちの心を捕らえてはなさず、話をしている献愛者も、聞いている献愛者も、質問したり答えたりすることにいささかも疲れを感じません。超越的な主題は、聞いても話してもだれも疲れを感じないほどすばらしいものです。献愛者でない人々は、「あの人たちは神のことを話すことだけにどうしてあれほどの時間を費やせるのだろう」と聞くかもしれません。しかし献愛者は、最高人格主神や献愛者のことについて聞いたり話したりしても十分に満足しません。聞いたり話したりするほどに、もっと聞こうとする熱意が高まるのです。ハレー・クリシュナ・マントラの唱名は、ハレー（*Hare*）、クリシュナ（*Kṛṣṇa*）、ラーマ（*Rāma*）という３つのことばの繰りかえしにすぎませんが、献愛者たちはこのハレー・クリシュナ・マントラを、なんの疲れも感じることなく１日24時間唱えつづけることができます。

## 第２節

*विदुर उवाच*
के ते प्रचेतसो नाम कस्यापत्यानि सुव्रत ।
कस्यान्ववाये प्रख्याताः कुत्र वा सत्रमासत ॥ २ ॥

ヴィドゥラ　ウヴァーチャ
*vidura uvāca*

ケー　テー　プラチェータソー　ナーマ
*ke te pracetaso nāma*

カッシャーパテャーニ　スヴラタ
*kasyāpatyāni suvrata*

カッシャーンヴァヴァーイェー　プラキハャーターハ
*kasyānvavāye prakhyātāḥ*

クトゥラ　ヴァー　サトゥランム　アーサタ
*kutra vā satram āsata*

*viduraḥ uvāca*—ヴィドゥラが尋ねた; *ke*—誰か; *te*—彼ら; *pracetasaḥ*—プラチェーターたち; *nāma*—その名前の; *kasya*—誰の; *apatyāni*—息子たち; *su-vrata*—吉兆な誓いをたてたマイトゥレーヤ; *kasya*—誰の; *anvavāye*—家族に; *prakhyātāḥ*—有名な; *kutra*—どこの; *vā*—もまた; *satram*—儀式; *āsata*—実行された。

**ヴィドゥラがマイトゥレーヤに尋ねた。「このうえなく高尚なお方よ。プラチェーターとはどのような人々なのでしょうか。どの家系に生まれ、だれの子息だったのでしょうか。そしてどこでその盛大な儀式を執行したのでしょうか」**

## 要旨解説

前の章では、偉大なナーラダがプラチェーターたちの儀式の場で３つの節を歌ったことが言及されました。そのことがヴィドゥラにとってさらなる質問への刺激になっています。

## 第３節

मन्ये महाभागवतं नारदं देवदर्शनम् ।
येन प्रोक्तः क्रियायोगः परिचर्याविधिर्हरेः ॥ ३ ॥

マニェー　マハー・バハーガヴァタンム
*manye mahā-bhāgavataṁ*

ナーラダンム　デーヴァ・ダルシャナンム
*nāradaṁ deva-darśanam*

イェーナ　プロークタハ　クリヤー・ヨーガハ
*yena proktaḥ kriyā-yogaḥ*

パリチャリャー・ヴィデヒィラ　ハレーヘ
*paricaryā-vidhir hareḥ*

*manye*—私は考える; *mahā-bhāgavatam*—あらゆる献愛者のなかでもっとも偉大な人物; *nāradam*—聖者ナーラダ; *deva*—最高人格主神; *darśanam*—～に会った者; *yena*—～によって; *proktaḥ*—語られて; *kriyā-yogaḥ*—献愛奉仕; *paricaryā*—奉仕をするために; *vidhiḥ*—その方法; *hareḥ*—最高人格主神に。

**ヴィドゥラがつづける。「私は、偉大な聖者ナーラダが献愛者のなかの献愛者であることをよく知っています。献愛奉仕を説くパーンチャラートゥリカ法について編纂され、最高人格主神に直接会われた人物です」**

## 要旨解説

至高主に近づく２つの方法があります。その１つがバーガヴァタ・マールガ（*bhāgavata-mārga*）、すなわち『シュリーマド・バーガヴァタム』の方法で、もう１つがパーンチャラートゥリカ・ヴィディ（*pāñcarātrika-vidhi*）です。パーンチャラートゥリカ・ヴィディは寺院での崇拝に関連した方法で、バーガヴァタ・ヴィディは聞くことと唱えることに始まる９つの方法を説いています。クリシュナ意識運動は両方を採用しており、そのことで最高人格主神を悟る道を着実に進むことを可能にしています。このパーンチャラートゥリカの方法は、ここでヴィドゥラが言及しているように、偉大な聖者ナーラダが最初に導入したものです。

## 第４節

स्वधर्मशीलैः पुरुषैर्भगवान् यज्ञपूरुषः ।
इज्यमानो भक्तिमता नारदेनेरितः किल ॥ ४ ॥

スヴァ・ダハルマ・シーライヒ　プルシャイル
*sva-dharma-śīlaiḥ puruṣair*

バハガヴァーン　ヤギャ・プールシャハ
*bhagavān yajña-pūruṣaḥ*

イッジャマーノー　バハクティマター
*ijyamāno bhaktimatā*

ナーラデーネーリタハ　キラ
*nāradeneritaḥ kila*

*sva-dharma-śīlaiḥ*—儀式の義務を実行すること; *puruṣaiḥ*—男性たちによって; *bhagavān*—最高人格主神; *yajña-pūruṣaḥ*—あらゆる儀式の享楽者; *ijyamānaḥ*—崇拝されて; *bhaktimatā*—献愛者によって; *nāradena*—ナーラダによって; *īritaḥ*—説明された; *kila*—実際に。

**プラチェーター全員が、最高人格主神を満足させるために宗教上の礼拝と儀式を執行していたとき、偉大な聖者ナーラダがドゥルヴァ・マハーラージャの崇高な気質について語った。**

### 要旨解説

ナーラダ・ムニはいつでも主の崇高な娯楽を讃えています。この節からわかるのは、ナーラダは主はもちろんのこと、主の献愛者をも讃えています。大聖者ナーラダの使命は、主の献愛奉仕を世に広めることにあります。この目的のために『ナーラダ・パンチャラートゥラ』という献愛奉仕の指導書を用意し、奉仕をするための情報を献愛者がいつも得られるように、そして１日24時間最高人格主神の喜びのために儀式をすることができるよう配慮しました。『バガヴァッド・ギーター』で言われているように、主は社会生活における４つの階級、すなわちブラーフマナ（*brāhmaṇa*）、クシャトリヤ（*kṣatriya*）、ヴァイシャ（*vaiśya*）、シュードラ（*śūdra*）を創りだしました。『ナーラダ・パンチャラートゥラ』には、社会階級の各階級がどのように至高主を喜ばせることができるかについて明確に説かれています。『バガヴァッド・ギーター』（第18章・第45節）では、*sve sve karmaṇy abhirataḥ saṁsiddhiṁ labhate naraḥ*（スヴェー　スヴェー　カルマニ　アビヒラタハ　サンムシッデヒィンム　ラバハテー　ナラハ）「自分に定められた義務を実践することで至高主を喜ばせることができる」と述べられています。

『シュリーマド・バーガヴァタム』（第１章・第２章・第13節）でも、*svanuṣṭhitasya dharmasya saṁsiddhir hari-toṣaṇam*（スヴァヌシュテヒィタッシャ　ダハルマッシャ　サンムシッデヒィル ハリ・トーシャナンム）「義務の完成は、自分に定められた義務を実行して最高人格主神を満足させるのを見ること」と述べられています。プラチェーターたちがこの指示にしたがって儀式を執行していたとき、ナーラダ・ムニはかれらの活動を見て満足し、そしてその儀式の場でドゥルヴァ・マハーラージャを讃えたいと望みました。

**第５節**

यास्ता देवर्षिणा तत्र वर्णिता भगवत्कथाः ।
मह्यं शुश्रूषवे ब्रह्मन् कार्त्स्न्येनाचष्टुमर्हसि ॥ ५ ॥

ヤース　ター　デーヴァルシナー　タトゥラ
*yās tā devarṣiṇā tatra*

ヴァルニター　バハガヴァトゥ・カタハーハ
*varṇitā bhagavat-kathāḥ*

マヒャンム　シュシュルーシャヴェー　ブラフマン
*mahyaṁ śuśrūṣave brahman*

カールトゥスニェーナーチャシュトゥンム　アルハシ
*kārtsnyenācaṣṭum arhasi*

*yāḥ*—～であるもの; *tāḥ*—それらすべて; *devarṣiṇā*—偉大な聖者ナーラダによって; *tatra*—そこで; *varṇitāḥ*—語られて; *bhagavat-kathāḥ*—主の活動に関連する教え; *mahyam*—私に; *śuśrūṣave*—とても聞きたいと願う; *brahman*—ブラーフマナよ; *kārtsnyena*—完全に; *ācaṣṭum arhasi*—どうか説明してください。

**ブラーフマナよ。ナーラダ・ムニはどのように最高人格主神の栄光を讃え、その集まりのなかでどのような娯楽について語られたのか、とても聞きたいと思います。どうか、主のその称讃についてすべてお話しください。**

**要旨解説**

『シュリーマド・バーガヴァタム』は*bhagavat-kathā*（バハガヴァトゥ・カタハー）、すなわち主の崇高な娯楽の記録に関する話題です。ヴィドゥラがマイトゥレーヤから聞きたいと願っていたことを、私たちも5,000年後の今聞くことができます。その熱意さえあれば。

## 第６節

*मैत्रेय उवाच*

ध्रुवस्य चोत्कलः पुत्रः पितरि प्रस्थिते वनम् ।
सार्वभौमश्रियं नैच्छदधिराजासनं पितुः ॥ ६ ॥

マイトゥレーヤ　ウヴァーチャ
*maitreya uvāca*

ドゥルヴァッシャ　チョートゥカラハ　プトゥラハ
*dhruvasya cotkalaḥ putraḥ*

ピタリ　プラステヒィテー　ヴァナンム
*pitari prasthite vanam*

サールヴァバハウマ・シュリヤンム　ナイッチャドゥ
*sārvabhauma-śriyaṁ naicchad*

アデヒィラージャーサナンム　ピトゥフ
*adhirājāsanaṁ pituḥ*

*maitreyaḥ uvāca*—偉大な聖者マイトゥレーヤ; *dhruvasya*—ドゥルヴァ・マハーラージャの; *ca*—もまた; *utkalaḥ*—ウトゥカラ; *putraḥ*—子息; *pitari*—父親の後に; *prasthite*—離れた; *vanam*—森に; *sārva-bhauma*—すべての土地を含んでいる; *śriyam*—富; *na aicchat*—望まなかった; *adhirāja*—国王の; *āsanam*—王座; *pituḥ*—父親の。

**偉大な聖者マイトゥレーヤが答えた。「ヴィドゥラよ。ドゥルヴァ・マハーラージャが森に向けて去っていたあと、子息ウトゥカラ（Utkala）は、この惑星全土の支配者のためにある父親の王座を受けつぐことを望まなかった」**

## 第７節

स जन्मनोपशान्तात्मा निःसङ्गः समदर्शनः ।
ददर्श लोके विततमात्मानं लोकमात्मनि ॥ ७ ॥

サ　ジャンマノーパシャーンタートゥマー
*sa janmanopaśāntātmā*

ニッサンガハ　サマ・ダルシャナハ
*niḥsaṅgaḥ sama-darśanaḥ*

ダダルシャ　ローケー　ヴィタタンム
*dadarśa loke vitatam*

アートゥマーナンム　ローカンム　アートゥマニ
*ātmānaṁ lokam ātmani*

*saḥ*—彼の子息ウトゥカラ; *janmanā*—誕生した初期から; *upaśānta*—非常に満足して; *ātmā*—魂; *niḥsaṅgaḥ*—執着することなく; *sama-darśanaḥ*—均衡のとれた; *dadarśa*—見た; *loke*—世界の; *vitatam*—広がっている; *ātmānam*—至高の魂; *lokam*—全世界; *ātmani*—至高の魂の中に。

**ウトゥカラは、生まれたときから何事にも完全に満たされ、世の中に対する執着をまったく感じていなかった。すべてが至高の魂によって支えられ、全生命体の心にいる至高の魂を見ることができたため、均衡のとれた視野を持っていたのである。**

### 要旨解説

ドゥルヴァ・マハーラージャの子息であるウトゥカラがしめしていた表情や気質は、マハー・バーガヴァタ（*mahā-bhāgavata*）そのものです。『バガヴァッド・ギーター』（第６章・第30節）では*yo māṁ paśyati sarvatra sarvaṁ ca mayi paśyati*（ヨー　マーンム　パッシャティ　サルヴァトゥラ　サルヴァンム　チャ　マイ　パッシャティ）、ひじょうに気高い献愛者は最高人格主神をどこにでも見ることができ、またすべてが至高者に支えられていることを見る、と言われています。また第９章の第４節でも、*mayā tatam idaṁ sarvaṁ jagad avyakta-mūrtinā*（マヤー　タタンム　イダンム　サルヴァンム　ジャガドゥ　アヴャクタ・ムールティナー）、「主クリシュナは、姿のない形で全宇宙に遍在している」と言われています。すべてが主に支えられているのですが、すべてが主自身である、と言えるわけではありません。高尚なマハー・バーガヴァタの献愛者はその気持ちですべてを見ます。さまざまな体に囚われた識別心で生命体を見ることなく、至高の魂・パラマートマーをすべての心のなかに見ています。だれであっても最高人格主神の部分体として見ているのです。至高主神の存在をあらゆる場所で体験しているマハー・バーガヴァタは至高主を見失うことがありませんし、また至高主もそのような献愛者を見失うことがありません。これは、神への愛情を高めた人物だけに可能なことです。

### 第８－９節

आत्मानं ब्रह्म निर्वाणं प्रत्यस्तमितविग्रहम् ।
अवबोधरसैकात्म्यमानन्दमनुसन्ततम् ॥ ८ ॥
अव्यवच्छिन्नयोगाग्निदग्धकर्ममलाशयः ।
स्वरूपमवरुन्धानो नात्मनोऽन्यं तदैक्षत ॥ ९ ॥

アートゥマーナンム　ブラフマ　ニルヴァーナンム
*ātmānaṁ brahma nirvāṇaṁ*

プラテャスタミタ・ヴィグラハンム
*pratyastamita-vigraham*

アヴァボーダハ・ラサイカートゥミャンム
*avabodha-rasaikātmyam*

アーナンダンム　アヌサンタタンム
*ānandam anusantatam*

アヴャヴァッチヒィンナ・ヨーガーグニ・
*avyavacchinna-yogāgni-*

ダグダハ・カルマ・マラーシャヤハ
*dagdha-karma-malāśayaḥ*

スヴァルーパンム　アヴァルンダハーノー
*svarūpam avarundhāno*

ナートゥマノー　ニャンム　タダイクシャタ
*nātmano 'nyaṁ tadaikṣata*

*ātmānam*—自己; *brahma*—魂; *nirvāṇam*—物質存在の終息; *pratyastamita*—終わって; *vigraham*—分離; *avabodha-rasa*—知識の豊かさによって; *eka-ātmyam*—一体性; *ānandam*—至福; *anusantatam*—拡大して; *avyavacchinna*—連続的な; *yoga*—ヨーガの修練によって; *agni*—その火によって; *dagdha*—燃えた; *karma*—結果への望み; *mala*—穢れ; *āśayaḥ*—彼の心の中に; *svarūpam*—本来の立場; *avarundhānaḥ*—悟っている; *na*—ではない; *ātmanaḥ*—至高の魂よりも; *anyam*—他の何か; *tadā*—その時; *aikṣata*—見た。

**ウトゥカラは、至高のブラフマンの知識を拡大させることで、肉体の束縛からすでに解放されていた。この解脱の境地はニルヴァーナ（nirvāṇa）として知られている。ウトゥカラは超越的な至福を感じ、果てしなく広がりつづける至福あふれる境地を満喫していた。これは、穢れた物質的物事をことごとく燃えつくす火に例えられるバクティ・ヨーガの修練によって達成されたのである。自己の悟りという自分本来の境地に立脚していた人物であり、献愛奉仕をするなかで、至高主と自分以外になにも見ることができなかった。**

## 要旨解説

この２つの節が『バガヴァッド・ギーター』の節（第18章・第54節）を説明しています。

ブラフマ・ブゥータハ　プラサンナートゥマー
*brahma-bhūtaḥ prasannātmā*

ナ　ショーチャティ　ナ　カーンクシャティ
*na śocati na kāṅkṣati*

サマハ　サルヴェーシュ　ブフーテーシュ
*samaḥ sarveṣu bhūteṣu*

マドゥ・バハクティンム　ラバハテー　パラーンム
*mad-bhaktiṁ labhate parām*

「超越的境地にある者は、すぐに至高のブラフマンを悟り、完全な喜びに浸る。決して嘆くこともなく、なにかを望むこともなくなる。そして、すべての生物に等しく接する。そのような境地で、わたしへの純粋な献愛奉仕に到達するのである」。このことについては主チャイタンニャの『シクシャーシュタカ』の最初の節でも説明されています。

チェートー・ダルパナ・マールジャナンム　バハヴァ・マハー・ダーヴァーグニ・ニルヴァーパナンム
*ceto-darpaṇa-mārjanaṁ bhava-mahā-dāvāgni-nirvāpaṇaṁ*

シュレーヤハ・カイラヴァ・チャンドゥリカー・ヴィタラナンム　ヴィデャー・ヴァドフゥー・ジーヴァナンム
*śreyaḥ-kairava-candrikā-vitaraṇaṁ vidyā-vadhū-jīvanam*
（『チャタンニャ・チャリタームリタ』アンテャ・第20章・第12節）

バクティ・ヨーガの方法はヨーガの頂点であり、なかでも主の聖なる名前の吟唱が献愛奉仕の主要な実践です。聖なる名前を唱えることで、ニルヴァーナ「物質存在の解脱」という完成が達成でき、主チャイタンニャが説明している精神的存在（*ānandāmbudhi-vardhanam*・アーナンダーンブディ・ヴァルダハナンム）という至福に満ちた生活が広がっていきます。その境地にいる人は、物質的な富、あるいは地球全体を統治するほどの王座にも興味はありません。この境地を*viraktir anyatra syāt*（ヴィラクティル　アニャトゥラ　シャートゥ）といいます。それが献愛奉仕の結果です。

献愛奉仕に高められるほどに、物質的な富や活動から無執着になっていきます。これが精神的気質、至福に満ちた境地です。『バガヴァッド・ギーター』（第2章・第59節）では、*paraṁ dṛṣṭvā nivartate*（パランム　ドゥリシュトゥヴァー　ニヴァルタテー）と述べられており、精神的境地における至福に満ちた生活という高い甘露を味わうことで、物質的な楽しみを捨て去る心境です。燃えさかる火にたとえられる精神的知識を高めることで、物質的望みがすべて燃えて灰になります。神秘的ヨーガの完成は、献愛奉仕を実践して最高人格主神との絶えまない関係を保つことで可能になります。献愛者は、毎瞬間至高者のことを考えています。条件づけられた魂たちは過去の生活の反動に束縛されていますが、ただ献愛奉仕をはじめるだけで穢れた物事すべてが燃えつきます。このことが『ナーラダ・パンチャラートゥラ』（『チャタンニャ・チャリタームリタ』マデャ・第19章・第170節）で*sarvopādhi-vinirmuktaṁ tat-paratvena nirmalam*（サルヴォーパーディ・ヴィニルムクタンム　タトゥ・パラトゥヴェーナ　ニルマランム）と述べられています。

## 第１０節

जडान्धबधिरोन्मत्तमूकाकृतिरतन्मतिः ।
लक्षितः पथि बालानां प्रशान्तार्चिरिवानलः ॥ १० ॥

ジャダーンダハ・バデヒィローンマッタ・
*jaḍāndha-badhironmatta-*

ムーカークリティル　アタン・マティヒ
*mūkākṛtir atan-matiḥ*

ラクシタハ　パテヒィ　バーラーナーンム
*lakṣitaḥ pathi bālānāṁ*

プラシャーンタールチル　イヴァーナラハ
*praśāntārcir ivānalaḥ*

*jaḍa*—愚かな; *andha*—盲人; *badhira*—耳の聞こえない人; *unmatta*—狂人; *mūka*—口のきけない人; *ākṛtiḥ*—見かけ; *a-tat*—そのようではない; *matiḥ*—彼の知性; *lakṣitaḥ*—彼は見られていた; *pathi*—道路で; *bālānām*—知性に欠ける人によって; *praśānta*—静かな; *arciḥ*—炎で; *iva*—〜のような; *analaḥ*—火。

**知性に欠ける路傍の人々にとって、ウトゥカラは愚かで、盲人で、耳がきこえず、口もきけず、狂っているかのように見えた。しかし、じっさいはそのような人間ではなかった。あたかも、灰におおわれて炎を出していないような状態にいたのである。**

### 要旨解説

ジャダ・バラタやウトゥカラのような偉大な聖人は、物質的な人々が作りだす矛盾、わずらわしさ、悪条件、逆境に巻きこまれないよう口を閉ざすことがあります。知性のない人々は、そのような聖人を狂人、聾唖（ろうあ）と考えます。しかしじつは、高尚な献愛者は献愛生活をしていない人々と話をするのを避けますが、献愛生活をしている人々とは友好的にふれあい、また何も知らない人には知識を与えるために話します。現実として、全世界は献愛者ではない人々で埋めつくされており、ひじょうに高尚な献愛者でもバジャナーナンディー（*bhajanānandī*）と呼ばれる人々は非献愛者を避けようとします。いっぽう、ゴーシュテャ・アーナンディー（*goṣṭhy-ānandī*）と呼ばれる献愛者は、献愛者を増やすために布教に励みます。しかしそれでも、そのような布教徒でも、精神生活に好意をもたない人々との接触を避けることがあります。

## 第１１節

मत्वा तं जडमुन्मत्तं कुलवृद्धाः समन्त्रिणः ।
वत्सरं भूपतिं चक्रुर्यवीयांसं भ्रमेः सुतम् ॥ ११ ॥

マトゥヴァー　タンム　ジャダンム　ウンマッタンム
*matvā taṁ jaḍam unmattaṁ*

クラ・ヴリッダハーハ　サマントゥリナハ
*kula-vṛddhāḥ samantriṇaḥ*

ヴァトゥサランム　ブゥーパティンム　チャクルル
*vatsaraṁ bhūpatiṁ cakrur*

ヤヴィーヤーンムサンム　ブゥラメーヘ　スタンム
*yavīyāṁsaṁ bhrameḥ sutam*

*matvā*—考えている; *tam*—ウトゥカラ; *jaḍam*—知性のない; *unmattam*—狂っている; *kula-vṛddhāḥ*—家族の年長者たち; *samantriṇaḥ*—大臣たちと共に; *vatsaram*—ヴァトゥサラ; *bhū-patim*—世界の統治者; *cakruḥ*—彼らはそうした; *yavīyāṁsam*—若い; *bhrameḥ*—ブラミの; *sutam*—子息。

**この理由から、大臣たちも家族の年長者たちも、ウトゥカラを知性の足りない、あるいは率直に言えば、狂った人間と考えていた。このため、かれらはブラミの子息である弟のヴァトゥサラを王座に就け、世界の王とした。**

### 要旨解説

君主制はあったけれども、内実は独裁体制ではなかったことがわかります。王座は王家の人間だけが就くことができましたが、家族の年長者や大臣たちが状況を見きわめて変更を決定し、適切な人物を王座に就けていました。現代でも、君主制が敷かれているところでは、大臣や年長者が、王家の候補者のなかから特定の人物を選んで王座に就けることがあります。

## 第１２節

स्वर्वीथिर्वत्सरस्येष्टा भार्यासूत षडात्मजान् ।
पुष्पार्णं तिग्मकेतुं च इषमूर्जं वसुं जयम् ॥ १२ ॥

スヴァルヴィーテヒィル　ヴァトゥサラッシェーシュター
*svarvīthir vatsarasyeṣṭā*

バハーリャースータ　シャドゥ・アートゥマジャーン
*bhāryāsūta ṣaḍ-ātmajān*

プシュパールナンム　ティグマケートゥンム　チャ
*puṣpārṇaṁ tigmaketuṁ ca*

イシャンム　ウールジャンム　ヴァスンム　ジャヤンム
*iṣam ūrjaṁ vasuṁ jayam*

*svarvīthiḥ*—スヴァルヴィーティ; *vatsarasya*—ヴァトゥサラ王の; *iṣṭā*—非常に愛しい; *bhāryā*—妻; *asūta*—～を産んだ; *ṣaṭ*—６; *ātmajān*—子息たち; *puṣpārṇam*—プシュパールナ; *tigmaketum*—ティグマケートゥ; *ca*—もまた; *iṣam*—イシャ; *ūrjam*—ウールジャ; *vasum*—ヴァス; *jayam*—ジャヤ。

**ヴァトゥサラ王にはスヴァルヴィーティという愛妻がいた。その妻から６人の子息、すなわちプシュパールナ、ティグマケートゥ、イシャ、ウールジャ、ヴァス、ジャヤが誕生した。**

### 要旨解説

ヴァトゥサラの妻はここで*iṣṭā*（イシュター）、「崇拝できる」ということばで描写されています。言いかえると、ヴァトゥサラの妻はすばらしい質をすべてそなえていたということです。自分の夫に対していつも誠実にふるまい、従順で、愛情をそそいでいました。家事をこなすための優れた質をすべてそなえていたのです。夫と妻がそのようなすばらしい気質にめぐまれ、心穏やかにともに暮らすことができれば、優れた子どもが誕生し、こうして家族生活全体が幸福で繁栄に包まれたものになります。

### 第１３節

पुष्पार्णस्य प्रभा भार्या दोषा च द्वे बभूवतुः ।
प्रातर्मध्यन्दिनं सायमिति ह्यासन् प्रभासुताः ॥ १३ ॥

プシュパールナッシャ　プラバハー　バハーリャー
*puṣpārṇasya prabhā bhāryā*

ドーシャー　チャ　ドゥヴェー　バブフーヴァトゥフ
*doṣā ca dve babhūvatuḥ*

プラータル　マデヒャンディナンム　サーヤンム
*prātar madhyandinaṁ sāyam*

イティ　ヒ　アーサン　プラバハー・スターハ
*iti hy āsan prabhā-sutāḥ*

*puṣpārṇasya*—プシュパールナの; *prabhā*—プラバー; *bhāryā*—妻; *doṣā*—ドーシャー; *ca*—もまた; *dve*—２; *babhūvatuḥ*—だった; *prātaḥ*—プラータル; *madhyandinam*—マデャンディナンム; *sāyam*—サーヤンム; *iti*—このように; *hi*—確かに; *āsan*—だった; *prabhā-sutāḥ*—プラバーの子息たち。

**プシュパールナには２人の妻、プラバーとドーシャーがいた。プラバーには３人の子息、プラータル、マデャンディナンム、サーヤンムがいた。**

**第１４節**

प्रदोषो निशिथो व्युष्ट इति दोषासुतास्त्रयः ।
व्युष्टः सुतं पुष्करिण्यां सर्वतेजसमादधे ॥ १४ ॥

プラドーショー　ニシトホー　ヴュシュタ
*pradoṣo niśitho vyuṣṭa*

イティ　ドーシャー・スタース　トゥラヤハ
*iti doṣā-sutās trayaḥ*

ヴュシュタハ　スタンム　プシュカリニャーンム
*vyuṣṭaḥ sutaṁ puṣkariṇyāṁ*

サルヴァテージャサンム　アーダデヘー
*sarvatejasam ādadhe*

*pradoṣaḥ*—プラドーシャ; *niśithaḥ*—ニシタハ; *vyuṣṭaḥ*—ヴュシュタ; *iti*—このように; *doṣā*—ドーシャーの; *sutāḥ*—子息たち; *trayaḥ*—３; *vyuṣṭaḥ*—ヴュシュタ; *sutam*—子息; *puṣkariṇyām*—プシュカリニーに; *sarva-tejasam*—サルヴァテージャー（あらゆる力を持つ）という名前の; *ādadhe*—もうけた。

**ドーシャーには３人の子息、プラドーシャ、ニシタハ、ヴュシュタがいた。ヴュシュタの妻をプシュカリニーといい、ひじょうに力強いサルヴァテージャーという名の子息を産んだ。**

**第１５－１６節**

स चक्षुः सुतमाकूत्यां पत्न्यां मनुमवाप ह ।
मनोरसूत महिषी विरजान्नड्वला सुतान् ॥ १५ ॥
पुरुं कुत्सं त्रितं ॐम्नं सत्यवन्तमृतं व्रतम् ।
अग्निष्टोममतीरात्रं प्रॐम्नं शिबिमुल्मुकम् ॥ १६ ॥

サ　チャクシュフ　スタンム　アークーテャーンム
*sa cakṣuḥ sutam ākūtyāṁ*

パトゥニャーンム　マヌンム　アヴァーパ　ハ
*patnyāṁ manum avāpa ha*

マノール　アスータ　マヒシー
*manor asūta mahiṣī*

ヴィラジャーン　ナドゥヴァラー　スターン
*virajān naḍvalā sutān*

プルンム　クトゥサンム　トゥリタンム　デュムナンム
*puruṁ kutsaṁ tritaṁ dyumnaṁ*

サテャヴァンタンム　リタンム　ヴラタンム
*satyavantam ṛtaṁ vratam*

アグニシュトーマンム　アティーラートゥランム
*agniṣṭomam atīrātraṁ*

プラデュムナンム　シビンム　ウルムカンム
*pradyumnaṁ śibim ulmukam*

*saḥ*—彼（サルヴァテージャー）; *cakṣuḥ*—チャクシュフという名前の; *sutam*—子息; *ākūtyām*—アークーティに; *patnyām*—妻; *manum*—チャークシュシャ・マヌ; *avāpa*—得た; *ha*—実際に; *manoḥ*—マヌの; *asūta*—～を産んだ; *mahiṣī*—女王; *virajān*—激情のない; *naḍvalā*—ナドゥヴァラー; *sutān*—子息達; *purum*—プル; *kutsam*—クトゥサ; *tritam*—トゥリタ; *dyumnam*—デュムナ; *satyavantam*—サテャヴァーン; *ṛtam*—リタ; *vratam*—ヴラタ; *agniṣṭomam*—アグニシュトーマ; *atīrātram*—アティーラートゥラ; *pradyumnam*—プラデュムナ; *śibim*—シビ; *ulmukam*—ウルムカ。

**サルヴァテージャーの妻アークーティはチャークシュシャという名の子息をもうけ、その子がマヌの創造期の最後に６番目のマヌとなった。チャークシュシャ・マヌの妻ナドゥヴァラーは、プル、クトゥサ、トゥリタ、デュムナ、サテャヴァーン、リタ、ヴラタ、アグニシュトーマ、アティーラートゥラ、プラデュムナ、シビ、ウルムカといった、申し分のない子息たちを産んだ。**

**第１７節**

उल्मुकोऽजनयत्पुत्रान्पुष्करिण्यां षडुत्तमान् ।
अ्रां सुमनसं ख्यातिं क्रतुम्रि।रसं गयम् ॥ १७ ॥

ウルムコー　ジャナヤトゥ　プトゥラーン
*ulmuko 'janayat putrān*

プシュカリニャーンム　シャドゥ　ウッタマーン
*puṣkariṇyāṁ ṣaḍ uttamān*

アンガンム　スマナサンム　キャーティンム
*aṅgaṁ sumanasaṁ khyātiṁ*

クラトゥンム　アンギラサンム　ガヤンム
*kratum aṅgirasaṁ gayam*

*ulmukaḥ*—ウルムカ; *ajanayat*—もうけた; *putrān*—子息達; *puṣkariṇyām*—彼の妻のプシュカリニーに; *ṣaṭ*—６; *uttamān*—非常に優れた; *aṅgam*—アンガ; *sumanasam*—スマナー; *khyātim*—キャーティ; *kratum*—クラトゥ; *aṅgirasam*—アンギラー; *gayam*—ガヤ。

**12人の子息のひとりウルムカは、妻のプシュカリニーとのあいだに６人の子息をもうけた。どれもすばらしい子息であり、その名前はアンガ、スマナー、キャーティ、クラトゥ、アンギラー、ガヤである。**

**第１８節**

सुनीथाऽङ्गस्य या पत्नी सुषुवे वेनमुल्बणम् ।
यद्दौःशील्यात्स राजर्षिर्निर्विण्णो निरगात्पुरात् ॥ १८ ॥

スニータハーンガッシャ　ヤー　パトゥニー
*sunīthāṅgasya yā patnī*

スシュヴェー　ヴェーナンム　ウルバナンム
*suṣuve venam ulbaṇam*

ヤドゥ・ダウフシーリャートゥ　サ　ラージャルシル
*yad-dauḥśīlyāt sa rājarṣir*

ニルヴィンノー　ニラガートゥ　プラートゥ
*nirviṇṇo niragāt purāt*

*sunīthā*—スニーター; *aṅgasya*—アンガの; *yā*—〜である彼女; *patnī*—妻; *suṣuve*—〜を産んだ; *venam*—ヴェーナ; *ulbaṇam*—心が非常に歪んだ; *yat*—〜である者; *dauḥśīlyāt*—邪悪な性格のために; *saḥ*—彼; *rāja-ṛṣiḥ*—神聖なアンガ王; *nirviṇṇaḥ*—非常に落胆して; *niragāt*—出ていった; *purāt*—家から。

**アンガの妻スニーターはヴェーナという子息をもうけたが、ひじょうに歪んだ心をもっていた子である。神聖な気質をもつアンガ王は、このヴェーナの邪悪な性格に落胆し、王国を捨てて森に入っていった。**

## 第１９－２０節

यम्र। शेपुः कुपिता वाग्वज्रा मुनयः किल ।
गतासोस्तस्य भूयस्ते ममन्थुर्दक्षिणं करम् ॥ १९ ॥
अराजके तदा लोके दस्युभिः पीडिताः प्रजाः ।
जातो नारायणांशेन पृथुराऊः क्षितीश्वरः ॥ २० ॥

ヤンム　アンガ　シェープフ　クピター
*yam aṅga śepuḥ kupitā*

ヴァーグ・ヴァジラー　ムナヤハ　キラ
*vāg-vajrā munayaḥ kila*

ガターソース　タッシャ　ブフーヤス　テー
*gatāsos tasya bhūyas te*

ママントフウル　ダクシナンム　カランム
*mamanthur dakṣiṇaṁ karam*

アラージャケー　タダー　ローケー
*arājake tadā loke*

ダッシュビヒヒ　ピーディターハ　プラジャーハ
*dasyubhiḥ pīḍitāḥ prajāḥ*

ジャートー　ナーラーヤナーンムシェーナ
*jāto nārāyaṇāṁśena*

プリトフウル　アーデャハ　クシティーシュヴァラハ
*pṛthur ādyaḥ kṣitīśvaraḥ*

*yam*—～である彼を（ヴェーナ）; *aṅga*—ヴィドゥラよ; *śepuḥ*—彼らは呪った; *kupitāḥ*—怒って; *vāk-vajrāḥ*—～の言葉は雷のように強い; *munayaḥ*—偉大な聖者達; *kila*—実際に; *gata-asoḥ tasya*—彼が死んだ後; *bhūyaḥ*—さらに; *te*—彼ら; *mamanthuḥ*—掻き混ぜた; *dakṣiṇam*—右; *karam*—手; *arājake*—王がいないことで; *tadā*—その時; *loke*—世界; *dasyubhiḥ*—無法者や盗賊によって; *pīḍitāḥ*—苦しんでいる; *prajāḥ*—全市民; *jātaḥ*—降誕した; *nārāyaṇa*—最高人格主神の; *aṁśena*—部分的代表者によって; *pṛthuḥ*—プリトゥ; *ādyaḥ*—根源の; *kṣiti-īśvaraḥ*—世界の支配者。

**ヴィドゥラよ。偉大な聖者たちが呪うとき、そのことばには雷ほどの絶大な威力がこめられている。かれらが怒りをこめてヴェーナ王を呪うと、王は死亡した。その死後、国王不在の状態になった国内にはあらゆる無法者や盗賊たちがはびこり、世は無政府状態におちいった。その結果として苦しんだのは市民たちである。この様子を見ていた偉**

**大な聖者たちは、ヴェーナの右手を切りおとして攪拌（かくはん）棒として使い、その結果、主ヴィシュヌが部分的化身として降誕し、世界の根源の皇帝であるプリトゥ王となった。**

### 要旨解説

君主制は民主制よりも優れています。それは、ひじょうに堅固な君主制が整っていれば、国内の規定原則はきわめて巧みに維持されるからです。100年前でさえ、インドのカシミール州の国王の力は絶大で、泥棒が逮捕されて国王のまえに引きだされると、国王はすぐその場で泥棒の両手を切り落としていました。この厳しい処罰のため、国内にはほとんど窃盗犯罪が起こりませんでした。だれかが道路に忘れ物をしても、だれも触れようとはしませんでした。所有者以外は移動できない、という規則があったからです。いわゆる民主主義という社会では、窃盗事件が発生すると警察官が来てその事件を記録するものの、ほとんどの場合窃盗犯はつかまりませんし、その犯人に対する罰もくだされません。このような無力な政府ゆえに、泥棒や詐欺師が全世界にはびこっています。

### 第２１節

विदुर उवाच
तस्य शीलनिधेः साधोर्ब्रह्मण्यस्य महात्मनः ।
राज्ञः कथमभूद्दुष्टा प्रजा यद्विमना ययौ ॥ २१ ॥

ヴィドゥラ　ウヴァーチャ
*vidura uvāca*

タッシャ　シーラ・ニデヘーヘ　サードホール
*tasya śīla-nidheḥ sādhor*

ブラフマニャッシャ　マハートゥマナハ
*brahmaṇyasya mahātmanaḥ*

ラーギャハ　カタハンム　アブフードゥ　ドゥシュター
*rājñaḥ katham abhūd duṣṭā*

プラジャー　ヤドゥ　ヴィマナー　ヤヤウ
*prajā yad vimanā yayau*

*viduraḥ uvāca*—ヴィドゥラが言った; *tasya*—彼（アンガ）の; *śīla-nidheḥ*—素晴らしい気質の源; *sādhoḥ*—神聖な人物; *brahmaṇyasya*—ブラーフマナ文化を愛する人物; *mahātmanaḥ*—偉大な魂; *rājñaḥ*—王の; *katham*—なぜ; *abhūt*—そうだった; *duṣṭā*—悪い; *prajā*—子息; *yat*—それによって; *vimanāḥ*—無関心であること; *yayau*—彼は去った。

**ヴィドゥラが聖者マイトゥレーヤに尋ねる。「気高いブラーフマナよ。アンガ王はひじょうに優れた人物です。高貴で神聖な気質にめぐまれ、ブラーフマナの文化を崇敬していました。そのような偉大な魂にヴェーナのような劣悪な子息がさずかり、またそのために自分の王国に無頓着になって森に去っていく、とはいったいどういうことなのでしょうか」**

### 要旨解説

家族生活を営む人物は、父親、母親、妻、子どもたちに囲まれて幸福な生活が送れるはずなのですが、ときには、その父親、母親、子ども、あるいは妻が自分の敵になるという状況になることがあります。チャーナキャ・パンディタが言っているように、多額の借金をかかえる父親が敵になり、再婚する母親が敵になり、あまりにも美しい妻が敵になり、愚かな悪人の息子が敵になります。家族の一員が敵になると、家族生活を営んだり、世帯者としての生活に困難が生じたりします。そのような状況は物質界では起こりうることです。ですから、ヴェーダ文化では50歳になったら家族から離れることが勧められていますが、そうすることで残りの人生においてクリシュナ意識を求める生活に没頭できるからです。

### 第２２節

किं वांहो वेन उद्दिश्य ब्रह्मदण्डमयूयुजन् ।
दण्डव्रतधरे राज्ञि मुनयो धर्मकोविदाः ॥ २२ ॥

キンム　ヴァーンムホー　ヴェーナ　ウッディッシャ
*kiṁ vāṁho vena uddiśya*

ブラフマ・ダンダンム　アユーユジャン
*brahma-daṇḍam ayūyujan*

ダンダ・ヴラタ・ダハレー　ラーギ
*daṇḍa-vrata-dhare rājñi*

ムナヨー　ダハルマ・コーヴィダーハ
*munayo dharma-kovidāḥ*

*kim*—なぜ; *vā*—もまた; *aṁhaḥ*—罪な活動; *vene*—ヴェーナに対して; *uddiśya*—見ている; *brahma-daṇḍam*—ブラーフマナの呪い; *ayūyujan*—彼らは与えることを望んだ; *daṇḍa-vrata-dhare*—刑罰の鞭（むち）を持つ者; *rājñi*—王に; *munayaḥ*—偉大な聖者たち; *dharma-kovidāḥ*—宗教原則に完全に精通している。

**ヴィドゥラがさらに尋ねた。「宗教原則をすべて知りつくしている偉大な聖者たちが、刑罰の鞭を持つ人物そのものであるヴェーナ王を呪うことで、最大の罰（brahma-śāpa・ブラフマ・シャーパ）を科すことを望むとは、どのような理由があったのでしょうか」**

### 要旨解説

王はだれをも罰することができる、とされていますが、この場合、偉大な聖者が王を罰したことになっています。王がなにか重大な過失を犯したはずです。でなければ、もっとも偉大で忍耐強いとされる偉大な聖者たちが、高尚な宗教上の意識を持つにかかわらず、王を罰したのですから。この出来事から察することができるのは、王はブラーフマナ文化を超えることはできない、ということです。王の上にはブラーフマナによる支配があり、必要とあらば、ブラーフマナは王を王座から降ろし、あるいは殺すこともできます。しかも、武器は一切使わず、ブラフマ・シャーパ（*brahma-śāpa*）というマントラを使って。呪いをかけるだけで相手はすぐに死ぬという、ブラーフマナたちにはそのような力があったのです。

### 第２３節

नावध्येयः प्रजापालः प्रजाभिरघवानपि ।
यदसौ लोकपालानां बिभर्त्योजः स्वतेजसा ॥ २३ ॥

ナーヴァデェーヤハ　プラジャー・パーラハ
*nāvadhyeyaḥ prajā-pālaḥ*

プラジャービヒル　アガハヴァーン　アピ
*prajābhir aghavān api*

ヤドゥ　アサウ　ローカ・パーラーナーンム
*yad asau loka-pālānāṁ*

ビバハルティ　オージャハ　スヴァ・テージャサー
*bibharty ojaḥ sva-tejasā*

*na*—けっしてない; *avadhyeyaḥ*—冒涜されること; *prajā-pālaḥ*—王; *prajābhiḥ*—市民達によって; *aghavān*—決して罪深くない; *api*—〜ではあるけれども; *yat*—なぜなら; *asau*—彼; *loka-pālānām*—多くの王の; *bibharti*—維持する; *ojaḥ*—力; *sva-tejasā*—個人の力によって。

**国の市民はだれであっても、国王がひじょうに罪な人物に見えることがあっても、決して冒涜してはなりません。王は多大な力をそなえているために、他の一切の支配者よりも強い影響力を持っています。**

### 要旨解説

ヴェーダ文化では、王は最高人格主神の代表者とされています。王はナラ・ナーラーヤナ（*nara-nārāyaṇa*）ということばで表現されますが、それは人間社会に王として現われた最高人格主神ナーラーヤナを指しています。市民は、ブラーフマナやクシャトリヤの王を決して冒涜しないという礼節を守らなくてはなりません。たとえ王が罪な人間に思えても市民はその王を侮辱してはならないのです。しかしヴェーナ王はナラ・デーヴァター（*nara-devatā*）たちに呪われています。ですから、ヴェーナ王はそれほどの重大な罪を犯した、と結論できます。

### 第２４節

एतदाख्याहि मे ब्रह्मन् सुनीथात्मजचेष्टितम् ।
श्रद्दधानाय भक्ताय त्वं परावरवित्तमः ॥ २४ ॥

エータドゥ　アーキャーヒ　メー　ブラフマン
*etad ākhyāhi me brahman*

スニータハートゥマジャ・チェーシュティタンム
*sunīthātmaja-ceṣṭitam*

シュラッダダハーナーヤ　バハクターヤ
*śraddadhānāya bhaktāya*

トゥヴァンム　パラーヴァラ・ヴィッタマハ
*tvaṁ parāvara-vittamaḥ*

*etat*—これらすべて; *ākhyāhi*—どうか説明してください; *me*—私に; *brahman*—偉大なブラーフマナよ; *sunīthā-ātmaja*—スニーターの子息、ヴェーナの; *ceṣṭitam*—活動; *śraddadhānāya*—誠実な; *bhaktāya*—あなたの献愛者に; *tvam*—あなた; *para-avara*—過去と未来; *vit-tamaḥ*—精通した。

**ヴィドゥラがマイトゥレーヤに願う。「ブラーフマナよ。あなた様は、過去であろうと未来であろうと、あらゆる主題について精通されています。ですから私は、ヴェーナ王がしたことをすべて知りたいと思っています。私はあなた様に服従した献愛者です。どうか、このことについてご説明ください」**

### 要旨解説

ヴィドゥラはマイトゥレーヤを精神指導者として受けいれました。弟子はいつも精神指導者に尋ね、精神指導者が答えますが、それは弟子が穏やかな気質と熱意をそなえている場合

にかぎります。シュリーラ・ヴィシュヴァナータ・チャクラヴァルティー・タークラは、精神指導者の慈悲によって弟子は至高主の慈悲で祝福される、と言いました。精神指導者は、弟子が従順で熱心な気持ちをそなえていなければ、超越的科学に関するすべての秘訣をしめそうとはしません。『バガヴァッド・ギーター』で述べられているように、精神指導者から知識をさずかる方法には、従順さ、質問、奉仕が欠かせません。

## 第２５節

*मैत्रेय उवाच*

अ्रोऽश्वमेधं राजर्षिराजहार महाक्रतुम् ।
नाजग्मुर्देवतास्तस्मिन्नाहूता ब्रह्मवादिभिः ॥ २५ ॥

マイトゥレーヤ　ウヴァーチャ
*maitreya uvāca*

アンゴー　シュヴァメーダハンム　ラージャルシル
*aṅgo 'śvamedhaṁ rājarṣir*

アージャハーラ　マハー・クラトゥンム
*ājahāra mahā-kratum*

ナージャグムル　デーヴァタース　タスミン–
*nājagmur devatās tasminn*

アーフーター　ブラフマ・ヴァーディビヒヒ
*āhūtā brahma-vādibhiḥ*

*maitreyaḥ uvāca*—マイトゥレーヤが答えた; *aṅgaḥ*—アンガ王; *aśvamedham*—アシュヴァメーダの儀式; *rāja-ṛṣiḥ*—神聖な王; *ājahāra*—実行した; *mahā-kratum*—盛大な儀式; *na*—ではない; *ājagmuḥ*—来た; *devatāḥ*—半神たち; *tasmin*—その儀式において; *āhūtāḥ*—招待されて; *brahma-vādibhiḥ*—儀式の執行に熟達したブラーフマナ達。

**シュリー・マイトゥレーヤが答えた。「ヴィドゥラよ。あるとき、偉大なアンガ王がアシュヴァメーダという盛大な儀式の執行を計画した。列席した博学なブラーフマナたちは半神たちを招く方法を熟知していたが、かれらの努力にかかわらず、半神のだれひとりとして参加も、そしてその儀式に現われもしなかった」**

### 要旨解説

ヴェーダの儀式はありふれた行動ではありません。半神たちはそのような儀式によく参加

し、儀式でささげられた動物たちは甦って次の新しい生涯をさずかっていました。しかしこのカリ・ユガになると、半神を招いたり、動物に新しい命をさずけたりするような力を持つブラーフマナはいなくなりました。以前、ヴェーダ・マントラに精通していたブラーフマナはマントラの威力をしめすことができたのですが、現代では、その質をそなえたブラーフマナがいないために、儀式の執行は禁じられています。馬がいけにえとしてささげられる儀式をアシュヴァメーダといいます。ときには牛がささげられる儀式（*gavālambha*・ガヴァーランバ）がおこなわれますが、それは食べるのが目的ではなく、マントラの威力をしめして動物に新しい命をさずけるためになされていました。ですから、現代では、唯一実践的なヤギャがサンキールタナ・ヤギャ、すなわちハレー・クリシュナ・マントラを１日24時間唱える方法が勧められています。

**第２６節**

तमूचुर्विस्मितास्तत्र यजमानमथर्त्विजः ।
हवींषि हूयमानानि न ते गृह्णन्ति देवताः ॥ २६ ॥

タンム　ウーチュル　ヴィスミタース　タトゥラ
*tam ūcur vismitās tatra*

ヤジャマーナンム　アタハルトゥヴィジャハ
*yajamānam athartvijaḥ*

ハヴィーンムシ　フーヤマーナーニ
*havīṁṣi hūyamānāni*

ナ　テー　グリフナンティ　デーヴァターハ
*na te gṛhṇanti devatāḥ*

*tam*—アンガ王に; *ūcuḥ*—言った; *vismitāḥ*—驚いて; *tatra*—そこで; *yajamānam*—儀式の指示者に; *atha*—その時; *ṛtvijaḥ*—僧侶達; *havīṁṣi*—純粋なバターの捧げ物; *hūyamānāni*—捧げられて; *na*—でない; *te*—彼ら; *gṛhṇanti*—受けいれる; *devatāḥ*—半神たち。

**儀式を執行していた僧侶たちがアンガ王に尋ねた。「王よ。我々は浄化されたバターを適切に儀式にささげている。しかし、これほどの努力にもかかわらず、半神たちはそれを受けいれようとしない」**

**第２７節**

राजन् हवींष्यदुष्टानि श्रद्धयासादितानि ते ।
छन्दांस्ययातयामानि योजितानि धृतव्रतैः ॥ २७ ॥

ラージャン　ハヴィーンムシ　アドゥシュターニ
*rājan havīṁṣy aduṣṭāni*

シュラッダハヤーサーディターニ　テー
*śraddhayāsāditāni te*

チャンダーンムシ　アヤータ・ヤーマーニ
*chandāṁsy ayāta-yāmāni*

ヨージターニ　ドゥリタ・ヴラタイヒ
*yojitāni dhṛta-vrataiḥ*

*rājan*—王よ; *havīṁṣi*—儀式での捧げ物; *aduṣṭāni*—穢れていない; *śraddhayā*—強い信念と十分な配慮で; *āsāditāni*—集められた; *te*—あなた; *chandāṁsi*—マントラ; *ayāta-yāmāni*—不完全ではない; *yojitāni*—適切に実施されて; *dhṛta-vrataiḥ*—十分な資質をそなえたブラーフマナ達によって。

**王よ。我々は、儀式の執行に必要な物事すべてがあなたの強い信念と十分な配慮のもとで適切に集められ、また穢されていないことをよく知っている。我々のヴェーダ聖歌の吟唱もどこをとっても不完全な部分はなく、ここにいるブラーフマナや僧侶たちも熟達し、儀式を正しく執行している。**

### 要旨解説

ブラーフマナは、ヴェーダのマントラを正しい発音で唱える科学に精通していなくてはなりません。マントラとサンスクリット語のことばの組み合わせは、正しい発音で唱えなくてはなりませんし、それができなければマントラの力は発揮されません。いっぽう、現代のブラーフマナたちはサンスクリット語に精通していないし、ブラーフマナとしての純粋な生活をしているわけではありません。しかし、ハレー・クリシュナ・マントラを唱えることで、儀式の執行における最高の恩恵をさずかることができます。ハレー・クリシュナ・マントラが適切に唱えられなくても、そのことばには強い力がこめられており、唱える人はその効果を得ることができるのです。

### 第２８節

न विदामेह देवानां हेलनं वयमण्वपि ।
यन्न गृह्णन्ति भागान् स्वान् ये देवाः कर्मसाक्षिणः ॥ २८ ॥

ナ　ヴィダーメーハ　デーヴァナーンム
*na vidāmeha devānāṁ*

ヘーラナンム　ヴァヤンム　アンヴ　アピ
*helanaṁ vayam aṇv api*

ヤン　ナ　グリフナンティ　バハーガーン　スヴァーン
*yan na gṛhṇanti bhāgān svān*

イェー　デーヴァーハ　カルマ・サークシナハ
*ye devāḥ karma-sākṣiṇaḥ*

*na*—ではない; *vidāma*—見ることができる; *iha*—この関連で; *devānām*—半神たちの; *helanam*—冒涜、軽視; *vayam*—我々; *aṇu*—ささいな; *api*—でさえ; *yat*—〜の理由で; *na*—ではない; *gṛhṇanti*—受けいれる; *bhāgān*—共有する; *svān*—自分自身の; *ye*—〜である者; *devāḥ*—半神たち; *karma-sākṣiṇaḥ*—儀式の目撃者たち。

**王よ。半神たちが冒涜されたり軽視されたりした理由は我々には見つからない。しかし、儀式を目撃している半神たちは自分たちの共有物を受けいれようとしない。その理由が、我々にはわからない。**

### 要旨解説

この節には、僧侶たち側が半神を軽視すれば、半神たちは儀式の共有物を受けとらない、ということがほのめかされています。同じように、献愛奉仕でも*sevā-aparādha*（セーヴァー・アパラーダハ）という冒涜があります。寺院でラーダーとクリシュナの神像を崇拝している献愛者は、そのような奉仕の冒涜を避けなくてはなりません。奉仕における冒涜については『献身奉仕の甘露』のなかに説明されています。さも神像に奉仕をしているかのようにふるまっても、セーヴァー・アパラーダに注意しなければ、ラーダー・クリシュナの神像はそのような非献愛者の奉仕を受けいれるはずがありません。ですから、寺院で神像崇拝の奉仕をしている献愛者は、自分勝手な方法を編みだすのではなく、清潔さを保つという規定原則に厳格に従わなくてはなりません。それができてこそ捧げ物は受けいれられるのです。

### 第２９節

*मैत्रेय उवाच*
अ॒रो द्विजवचः श्रुत्वा यजमानः सुदुर्मनाः ।
तत्प्रष्टुं व्यसृजद्वाचं सदस्यांस्तदनुज्ञया ॥ २९ ॥

マイトゥレーヤ　ウヴァーチャ
*maitreya uvāca*

アンゴー　ドゥヴィジャ・ヴァチャハ　シュルトゥヴァー
*aṅgo dvija-vacaḥ śrutvā*

ヤジャマーナハ　スドゥルマナーハ
*yajamānaḥ sudurmanāḥ*

タトゥ　プラシュトゥンム　ヴァスリジャドゥ　ヴァーチャンム
*tat praṣṭuṁ vyasṛjad vācaṁ*

サダッシャーンムス　タドゥ・アヌギャヤー
*sadasyāṁs tad-anujñayā*

*maitreyaḥ uvāca*—偉大な聖者マイトゥレーヤが答えた; *aṅgaḥ*—アンガ王; *dvija-vacaḥ*—そのブラーフマナ-たちの言葉; *śrutvā*—聞いたあと; *yajamānaḥ*—儀式の執行者; *sudurmanāḥ*—心に深い悲しみを覚えて; *tat*—そのことについて; *praṣṭum*—尋ねるために; *vyasṛjat vācam*—彼は話した; *sadasyān*—僧侶達に; *tat*—彼らの; *anujñayā*—許可を得ること。

**マイトゥレーヤが説明した。「僧侶たちのことばを聞いたアンガ王はひじょうに困惑した。そのとき王は、沈黙を破る許可をブラーフマナたちから得て、儀式の場にいた僧侶たち全員に尋ねた」**

**第３０節**

नागच्छन्त्याहुता देवा न गृह्णन्ति ग्रहानिह ।
सदसस्पतयो ब्रूत किमवद्यं मया कृतम् ॥ ३० ॥

ナーガッチャンティ　アーフター　デーヴァー
*nāgacchanty āhutā devā*

ナ　グリフナンティ　グラハーン　イハ
*na gṛhṇanti grahān iha*

サダサス・パタヨー　ブルータ
*sadasas-patayo brūta*

キンム　アヴァデャンム　マヤー　クリタンム
*kim avadyaṁ mayā kṛtam*

*na*—ではない; *āgacchanti*—来ている; *āhutāḥ*—招かれて; *devāḥ*—半神達; *na*—ではない; *gṛhṇanti*—受けいれている; *grahān*—共有する; *iha*—その儀式で; *sadasaḥ-patayaḥ*—僧侶達よ; *brūta*—説明してほしい; *kim*—何; *avadyam*—冒涜; *mayā*—私によって; *kṛtam*—為された。

**アンガ王が僧侶たちに呼びかけた。「僧侶たちよ。私がどのような冒涜をおかしてしまったのか、教えていただきたい。半神たちは、招かれているのに、この儀式に参加しようとしないし、自分たちの供物を受けいれようとしない」**

## 第３１節

*सदसस्पतय ऊचुः*
नरदेवेह भवतो नाघं तावन्मनाक् स्थितम् ।
अस्त्येकं प्राक्तनमघं यदिहेदृक् त्वमप्रजः ॥ ३१ ॥

サダサス・パタヤ　ウーチュフ
*sadasas-pataya ūcuḥ*

ナラ・デーヴェーハ　バハヴァトー
*nara-deveha bhavato*

ナーガハンム　ターヴァン　マナーク　ステヒィタンム
*nāghaṁ tāvan manāk sthitam*

アスティ　エーカンム　プラークタナンム　アガハンム
*asty ekaṁ prāktanam aghaṁ*

ヤドゥ　イヘードゥリク　トゥヴァンム　アプラジャハ
*yad ihedṛk tvam aprajaḥ*

*sadasaḥ-patayaḥ ūcuḥ*—僧侶の筆頭者が言った; *nara-deva*—王よ; *iha*—現世で; *bhavataḥ*—あなたの; *na*—ではない; *agham*—罪な活動; *tāvat manāk*—ほんのわずかも; *sthitam*—位置されて; *asti*—〜がある; *ekam*—１つ; *prāktanam*—前世の誕生で; *agham*—罪な行ない; *yat*—それによって; *iha*—現世で; *īdṛk*—このような; *tvam*—あなた; *aprajaḥ*—子息がいない。

**僧侶の筆頭者が言った。「王よ。我々には、あなたの現世のなかに、あなたの心にでさえ罪なおこないは見えない。だから、あなたが冒涜を犯しているとは思えない。しかし、前世で罪なことをしており、そのために、あらゆるすばらしい気質をそなえているにもかかわらず、子息をさずかっていない」**

### 要旨解説

結婚の目的は子息をもうけることにあります。子は地獄の状態にいるかもしれない自分の父親と先祖を助けるために必要だからです。ゆえにチャーナキャ・パンディタは、*putra-hīnaṁ gṛhaṁ śūnyam*（プトゥラ・ヒーナンム　グリハンム　シューニャンム）「息子がいなければ、結婚生活は忌まわしいものでしかない」と言いました。アンガ王は現世でひじょうに敬虔な人物だったのですが、前世で罪なことをしていたため子どもがさずからなかったのでした。ですから結論として、息子がさずからないという人は前世で罪なおこないをしていた、と言えます。

## 第３２節

तथा साधय भद्रं ते आत्मानं सुप्रजं नृप ।
इष्टस्ते पुत्रकामस्य पुत्रं दास्यति यज्ञभुक् ॥ ३२ ॥

タタハー　サーダハヤ　バハドゥランム　テー
*tathā sādhaya bhadraṁ te*

アートゥマーナンム　スプラジャンム　ヌリパ
*ātmānaṁ suprajaṁ nṛpa*

イシュタス　テー　プトゥラ・カーマッシャ
*iṣṭas te putra-kāmasya*

プトゥランム　ダーッシャティ　ヤギャ・ブック
*putraṁ dāsyati yajña-bhuk*

*tathā*—ゆえに; *sādhaya*—得るための儀式を執行せよ; *bhadram*—素晴らしい幸運; *te*—あなたにとって; *ātmānam*—あなた自身; *su-prajam*—優れた子息; *nṛpa*—王よ; *iṣṭaḥ*—崇拝されて; *te*—あなたによって; *putra-kāmasya*—子息を得る願い; *putram*—子息; *dāsyati*—主は授けるだろう; *yajña-bhuk*—主、儀式の結果を楽しむ者。

**王よ。我々はあなたにあらゆる幸運がおとずれることを願っている。あなたには子息がいない、しかし、ただちにさずかるよう至高主に願えば、そしてそのために儀式をおこなえば、儀式の結果を楽しむ方、すなわち最高人格主神がその望みをかなえることだろう。**

## 第３３節

तथा स्वभागधेयानि ग्रहीष्यन्ति दिवौकसः ।
यऽज्ञपुरुषः साक्षादपत्याय हरिर्वृतः ॥ ३३ ॥

タタハー　スヴァ・バハーガデヘーヤーニ
*tathā sva-bhāgadheyāni*

グラヒーッシャンティ　ディヴァウカサハ
*grahīṣyanti divaukasaḥ*

ヤドゥ　ヤギャ・プルシャハ　サークシャードゥ
*yad yajña-puruṣaḥ sākṣād*

アパテャーヤ　ハリル　ヴリタハ
*apatyāya harir vṛtaḥ*

*tathā*—そこで; *sva-bhāga-dheyāni*—儀式での彼らの共有; *grahīṣyanti*—受けいれるだろう; *diva-okasaḥ*—すべての半神達; *yat*—なぜなら; *yajña-puruṣaḥ*—あらゆる儀式を楽しむ方; *sākṣāt*—直接に; *apatyāya*—子息を得る目的で; *hariḥ*—最高人格主神; *vṛtaḥ*—招かれる。

**あらゆる儀式を楽しむ至高の方であるハリが、子息を願うあなたの願いを満たすために招かれるのであれば、半神たち全員が主とともに来て、その儀式の供物を受けいれるだろう。**

### 要旨解説

どのような儀式であっても、あらゆる儀式の結果を楽しむ主ヴィシュヌを満足させるためにおこなわれるものです。そして、主ヴィシュヌが儀式の場に来ることに同意すれば、半神たちが主人に従うのは当然のことであり、彼らの共有物もその儀式にささげられます。いずれにしても、儀式は主ヴィシュヌの満足のためにおこなわれるものであり、半神のためではありません。

### 第３４節

तांस्तान् कामान् हरिर्ददीतान् यान् कामयते जनः ।
आराधितो यथैवैष तथा पुंसां फलोदयः ॥ ३४ ॥

ターンムス　ターン　カーマーン　ハリル　ダデャードゥ
*tāṁs tān kāmān harir dadyād*

ヤーン　ヤーン　カーマヤテー　ジャナハ
*yān yān kāmayate janaḥ*

アーラーデヒトー　ヤタハイヴァイシャ
*ārādhito yathaivaiṣa*

タタハー　プンムサーンム　パハローダヤハ
*tathā puṁsāṁ phalodayaḥ*

*tān tān*—それら; *kāmān*—望む対象; *hariḥ*—主; *dadyāt*—与えるだろう; *yān yān*—なんであっても; *kāmayate*—望む; *janaḥ*—その人物; *ārādhitaḥ*—崇拝されて; *yathā*—〜として; *eva*—確かに; *eṣaḥ*—主; *tathā*—同様に; *puṁsām*—人々の; *phala-udayaḥ*—その結果。

**儀式（カルマ・カーンダ活動にもとづく儀式）の執行者は、望みを達成するために主を崇拝し、そしてその望みを達成する。**

### 要旨解説

『バガヴァッド・ギーター』で主は、崇拝する者の望みに応じて恩恵をさずける、と言います。最高人格主神は、物質界で条件づけられた全生命体に、自由に活動する意志を与えています。しかし献愛者に対しては、そのように行動するのではなく、「わたしが献愛者の世話をするのだから、わたしに身をゆだねたほうがいい」と言います。それが献愛者と、そして結果にこだわって活動する人々との違いです。結果を求める人々は活動の結果だけを楽しみますが、献愛者は至高主に導かれているため、ふるさとに、神のもとに帰る、という人生の究極目標を達成するために献愛奉仕に高められていきます。この節にある重要なことばは *kāmān*（カーマーン）で、これは「感覚満足をもとめる望み」という意味です。献愛者にカーマーンはいっさいありません。*Anyābhilāṣitā-śūnya*（アニャービヒラーシター・シューニャ）の境地にいます。献愛者は感覚満足に対する望みはいっさいありません。ただひとつの目的は主の感覚を満足させる、あるいは喜ばせることにあります。それがカルミーと献愛者の違いです。

### 第３５節

इति व्यवसिता विप्रास्तस्य राज्ञः प्रजातये ।
पुरोडाशं निरवपन् शिपिविष्टाय विष्णवे ॥ ३५ ॥

イティ　ヴャヴァシター　ヴィプラース
*iti vyavasitā viprās*

タッシャ　ラーギャハ　プラジャータイェー
*tasya rājñaḥ prajātaye*

プローダーシャンム　ニラヴァパン
*puroḍāśaṁ niravapan*

シピ・ヴィシュターヤ　ヴィシュナヴェー
*śipi-viṣṭāya viṣṇave*

*iti*—こうして; *vyavasitāḥ*—決定して; *viprāḥ*—そのブラーフマナたち; *tasya*—彼の; *rājñaḥ*—王の; *prajātaye*—息子を得る目的で; *puroḍāśam*—儀式に必要な物品; *niravapan*—捧げた; *śipi-viṣṭāya*—儀式の火の中にいる主に; *viṣṇave*—主ヴィシュヌに。

**こうしてブラーフマナたちは、アンガ王の子息のために、全生命体の心のなかにいる主ヴィシュヌに供物をささげる決定をした。**

### 要旨解説

儀式の規則では、動物がヤギャの場でいけにえにされることがあります。そのような動物

は、ただ殺されるためではなく、新しい命を吹きこむためにいけにえにされます。この行為は、ヴェーダのマントラが正しく発音されているかどうかを確かめるためになされます。医療研究所では小動物を殺して治療効果を調べることがあります。その医療行為で殺される動物は生きかえりませんが、ヤギャの場では、動物がいけにえにされても、ヴェーダ・マントラの力によってふたたび命をさずかります。この節では*śipi-viṣṭāya*（シピ・ヴィシュターヤ）ということばが使われています。*Śipi*（シピ）は「儀式の炎」を指します。儀式の火のなかで供物がその炎にささげられると、主ヴィシュヌがその炎という姿として現われます。このことから、主ヴィシュヌはシピヴィシュタ（Śipiviṣṭa） としても知られています。

### 第３６節

तस्मात्पुरुष उत्तस्थौ हेममाल्यमलाम्बरः ।
हिरण्मयेन पात्रेण सिद्धमादाय पायसम् ॥ ३६ ॥

タスマートゥ　プルシャ　ウッタスタハウ
*tasmāt puruṣa uttasthau*

ヘーマ・マーリ　アマラーンバラハ
*hema-māly amalāmbaraḥ*

ヒランマイェーナ　パートゥレーナ
*hiraṇmayena pātreṇa*

シッダハンム　アーダーヤ　パーヤサンム
*siddham ādāya pāyasam*

*tasmāt*—その火から; *puruṣaḥ*—ひとりの人物; *uttasthau*—現われた; *hema-mālī*—黄金の花輪をかけて; *amala-ambaraḥ*—白い衣服を着て; *hiraṇmayena*—黄金の; *pātreṇa*—水差しを手にして; *siddham*—料理された; *ādāya*—持っている; *pāyasam*—牛乳で炊いた米。

**供物が火のなかにささげられた瞬間、その火の祭壇から、白い衣装に黄金の花輪をかけたひとりの人物が現われた。黄金の水差しを手にし、そのなかは牛乳で料理された米で満たされている。**

### 第３７節

स विप्रानुमतो राजा गृहीत्वाञ्जलिनौदनम् ।
अवघ्राय मुदा युक्तः प्रादात्पत्न्या उदारधीः ॥ ३७ ॥

サ　ヴィプラーヌマトー　ラジャ
*sa viprānumato raja*

グリヒートゥヴァーンジャリナウダナンム
*gṛhītvāñjalinaudanam*

アヴァグラーヤ　ムダー　ユクタハ
*avaghrāya mudā yuktaḥ*

プラーダートゥ　パトゥニャー　ウダーラ・デヒィーヒ
*prādāt patnyā udāra-dhīḥ*

*saḥ*—彼; *vipra*—ブラーフマナたちの; *anumataḥ*—許可を得ること; *rājā*—王; *gṛhītvā*—受け取ること; *añjalinā*—合わせた手に; *odanam*—牛乳で煮た米; *avaghrāya*—香りを嗅いだ後; *mudā*—大いに喜んで; *yuktaḥ*—固定して; *prādāt*—捧げた; *patnyai*—妻に; *udāra-dhīḥ*—寛大な心。

**王はひじょうに寛大な心の持ち主であり、僧侶たちの許しを得たあと、合わせた手のなかにその授かり物を受けとり、香りを嗅いだあとその一部を妻に与えた。**

### 要旨解説

この節の*udāra-dhīḥ*（ウダーラ・デヒィーヒ）はこの文脈で重要な意味がこめられています。王の妻、スニーターはこの恩恵をさずかるにふさわしい女性ではありませんでしたが、王は寛大な心から、ヤギャ・プルシャ（*yajña-puruṣa*）から受けとった牛乳で煮た米のプラサーダ（*prasāda*）をためらうことなく妻に与えました。もちろん、すべては最高人格主神によって計画されていることです。これからの節で説明されるように、このできごとは王にとって好ましいことではありませんでした。王が寛大な心の持ち主だったことから、最高人格主神は王の物質界への無執着心を強めるために、残虐な心を持つ息子が女王に生まれ、そして王が家庭を去っていくよう配慮したのです。すでに説明したように、主ヴィシュヌはカルミーの望みを満たしますが、献愛者の望みは別の形で叶えます。そうすることでやがて主に近づいていくからです。これは『バガヴァッド・ギーター』でも、*dadāmi buddhi-yogaṁ taṁ yena mām upayānti te*（ダダーミ　ブッデヒィ・ヨーガンム　タンム　イェーナ　マーンム　ウパヤーンティ　テー）と確証されていることです。主は、献愛者がさらに高められる機会を与えます。その結果、ふるさとに、神の元に帰っていけるように。

### 第３８節

सा तत्पुंसवनं राज्ञी प्राश्य वै पत्युरादधे ।
गर्भं काल उपावृत्ते कुमारं सुषुवेऽप्रजा ॥ ३८ ॥

サ　タトゥ　プンム・サヴァナンム　ラーギー
*sā tat puṁ-savanaṁ rājñī*

プラーッシャ　ヴァイ　パテュル　アーダデヘー
*prāśya vai patyur ādadhe*

ガルバハンム　カーラ　ウパーヴリッテー
*garbhaṁ kāla upāvṛtte*

クマーランム　スシュヴェー　プラジャー
*kumāraṁ suṣuve 'prajā*

*sā*—彼女; *tat*—その食べ物; *pum-savanam*—男児を作りだす; *rājñī*—女王; *prāśya*—食べること; *vai*—実際に; *patyuḥ*—夫から; *ādadhe*—子を宿した; *garbham*—妊娠; *kāle*—その時期が来た時; *upāvṛtte*—現われた; *kumāram*—息子; *suṣuve*—～を産んだ; *aprajā*—息子がいない。

**女王に息子はいなかったが、男児を作りだす力がこめられたその食べ物を食べたあと、夫の子を宿し、やがて息子を産んだ。**

**要旨解説**

10種類の浄化手段のなかにプンム・サヴァナンム（*puṁ-savanam*）があり、これは妻が主ヴィシュヌにささげられた残り物であるプラサーダをさずかり、そのあと夫との性交渉によって子どもをさずかる、というものです。

**第３９節**

स बाल एव पुरुषो मातामहमनुव्रतः ।
अधर्मांशोद्भवं मृत्युं तेनाभवदधार्मिकः ॥ ३९ ॥

サ　バーラ　エーヴァ　プルショー
*sa bāla eva puruṣo*

マーターマハンム　アヌヴラタハ
*mātāmaham anuvrataḥ*

アダハルマーンムショードゥバハヴァンム　ムリテュンム
*adharmāṁśodbhavaṁ mṛtyuṁ*

テーナーバハヴァドゥ　アダハールミカハ
*tenābhavad adhārmikaḥ*

*saḥ*—その; *bālaḥ*—子ども; *eva*—確かに; *puruṣaḥ*—男; *mātā-maham*—母方の祖父; *anuvrataḥ*—～の従者; *adharma*—無宗教の; *aṁśa*—一部から; *udbhavam*—現われた者; *mṛtyum*—死; *tena*—これによって; *abhavat*—彼はなった; *adhārmikaḥ*—無宗教。

**その男児は、部分的に無宗教の王家に生まれた。祖父は死の権化であり、やがて少年はその従者として育っていった。そしておそるべき無宗教の人間となった。**

### 要旨解説

子どもの母スニーターは死の権化の娘でした。ふつう、娘は父親の資質を受けつぎ、息子は母親の資質を受けつぎます。ですから自明の理として、同類の質を持つ両者が互いに等しくなるように、アンガ王に生まれたその子は、母方の祖父の従者になりました。スムリティ・シャーストラ（*smṛti-śāstra*）によると、子どもはふつう母方の家庭の規則に従います。*Narāṇāṁ mātula-karma*（ナラーナーンム　マートゥラ・カルマ）は、 一般的に子どもは母方の家族の気質に従う、という意味です。母方の家庭がひじょうに堕落していたり罪深かったりすれば、すぐれた父親にめぐまれていても、母方の家族の犠牲になります。ですから、ヴェーダ文化によると、結婚のまえに、男性と女性双方の家族の考証がおこなわれます。占星術の計算によってその結びつきが完璧であることがわかれば、そこで結婚の約束が交わされます。しかし時には間違いが起こり、家族生活が悲惨な状態になることがあります。

この節から、アンガ王はスニーターという性根の悪い妻をめとったように見えます。スニーターが死の権化の娘だったからです。ときに主は献愛者に不運な妻を用意し、そのことでやがてその家族環境をとおして妻と家庭に無執着になり、献愛奉仕の道を着実に進めるよう配慮します。アンガ王は、最高人格主神の配慮によって、敬虔な献愛者であったにもかかわらず、スニーターのような悪妻をめとり、そしてヴェーナのような邪悪な子をさずかったように見えます。しかしその結果として、王は家族生活の束縛から完全に自由になり、家を去り、そして神の元に帰っていきました。

### 第４０節

स शरासनमुऽद्यम्य मृगयुर्वनगोचरः ।
हन्त्यसाधुर्मृगान् दीनान् वेनोऽसावित्यरौज्जनः ॥ ४० ॥

サ　シャラーサナンム　ウデャミャ
*sa śarāsanam udyamya*

ムリガユル　ヴァナ・ゴーチャラハ
*mṛgayur vana-gocaraḥ*

ハンティ　アサードゥフル　ムリガーン　ディーナーン
*hanty asādhur mṛgān dīnān*

ヴェーノー　サーヴ　イティ　アラウジ　ジャナハ
*veno 'sāv ity arauj janaḥ*

*saḥ*—ヴェーナという名前の少年; *śarāsanam*—彼の弓; *udyamya*—手にして; *mṛgayuḥ*—狩人; *vana-gocaraḥ*—森に入っている; *hanti*—殺していた; *asādhuḥ*—非常に残酷なことに; *mṛgān*—シカ; *dīnān*—哀れな; *venaḥ*—ヴェーナ; *asau*—彼が来た; *iti*—こうして; *araut*—叫んでいた; *janaḥ*—すべての人々。

**その残虐な少年は、よく弓と矢を手にして森に入り、無害なシカを手当たりしだいに殺していたが、人々はその姿を見るといっせいに叫んだ、「極悪非道のヴェーナが来るぞ！　極悪非道のヴェーナが来るぞ！」と。**

### 要旨解説

クシャトリヤは、殺害する方法を学ぶために森に入って狩りをすることが許されています。食べたり、ほかの目的で動物を殺したりするためではありません。クシャトリヤの王は、ときには国内の犯罪者の首を切り落とすことが当然とされていました。この理由で、クシャトリヤは森で狩りをすることが許されていたのです。アンガ王の子、ヴェーナは、劣悪な母親から誕生したため、きわめて残虐で、よく森に行っては不必要に動物を殺していました。付近の住民たちは、かれを見るだけで恐怖におののき、「ヴェーナが来るぞ！　ヴェーナが来るぞ！」と悲鳴をあげていました。このように、ヴェーナは幼いときから市民たちにとって恐れられる存在だったのです。

### 第４１節

आक्रीडे क्रीडतो बालान् वयस्यानतिदारुणः ।
प्रसह्य निरनुक्रोशः पशुमारममारयत् ॥ ४१ ॥

アークリーデー　クリーダトー　バーラーン
*ākrīḍe krīḍato bālān*

ヴァヤッシャーン　アティダールナハ
*vayasyān atidāruṇaḥ*

プラサヒャ　ニラヌクローシャハ
*prasahya niranukrośaḥ*

パシュ・マーランム　アマーラヤトゥ
*paśu-māram amārayat*

*ākrīḍe*—遊び場で; *krīḍataḥ*—遊んでいるとき; *bālān*—少年達; *vayasyān*—同年代の; *ati-dāruṇaḥ*—非常に残酷な; *prasahya*—力づくで; *niranukrośaḥ*—無慈悲; *paśu-māram*—動物を殺すように; *amārayat*—殺した。

この少年はきわめて残酷で、同年代の少年たちと遊んでいたとき、かれらを、あたかも屠殺用の動物のように情け容赦なく殺していた。

### 第４２節

तं विचक्ष्य खलं पुत्रं शासनैर्विविधैर्नृपः ।
यदा न शासितुं कल्पो भृशमासीत्सुदुर्मनाः ॥ ४२ ॥

タンム　ヴィチャクッシャ　カハランム　プトゥランム
*taṁ vicakṣya khalaṁ putraṁ*

シャーサナイル　ヴィヴィダハイル　ヌリパハ
*śāsanair vividhair nṛpaḥ*

ヤダー　ナ　シャーシトゥンム　カルポー
*yadā na śāsituṁ kalpo*

ブァリシャンム　アーシートゥ　スドゥルマナーハ
*bhṛśam āsīt sudurmanāḥ*

*tam*—彼を; *vicakṣya*—見ている; *khalam*—残酷な; *putram*—息子; *śāsanaiḥ*—懲罰によって; *vividhaiḥ*—さまざまな種類の; *nṛpaḥ*—王; *yadā*—～の時; *na*—ではない; *śāsitum*—支配するために; *kalpaḥ*—～出来た; *bhṛśam*—非常に; *āsīt*—～になった; *su-durmanāḥ*—心を痛めた。

我が子ヴェーナの残酷で無慈悲なおこないを見るたび、アンガ王は矯正するためにいろいろな罰を与えたが、良識ある人間に変えることはできなかった。こうして、王は心を痛めるばかりであった。

### 第４３節

प्रायेणाभ्यर्चितो देवो येऽप्रजा गृहमेधिनः ।
कदपत्यभृतं दुःखं ये न विन्दन्ति दुर्भरम् ॥ ४३ ॥

プラーイェーナービヒャルチトー　デーヴォー
*prāyeṇābhyarcito devo*

イェー　プラジャー　グリハ・メーデヒィナハ
*ye 'prajā gṛha-medhinaḥ*

カドゥ・アパテャ・ブァリタンム　ドゥァカハンム
*kad-apatya-bhṛtaṁ duḥkhaṁ*

イェー　ナ　ヴィンダンティ　ドゥルバハランム
*ye na vindanti durbharam*

*prāyeṇa*—おそらく; *abhyarcitaḥ*—崇拝された; *devaḥ*—主; *ye*—〜である彼ら; *aprajāḥ*—息子がいないこと; *gṛha-medhinaḥ*—家庭に住んでいる者たち; *kad-apatya*—劣悪な息子によって; *bhṛtam*—原因になった; *duḥkham*—不幸; *ye*—〜である彼ら; *na*—ではない; *vindanti*—苦しむ; *durbharam*—耐えられない。

**王は考えた。「息子のいない人々が幸運であることは間違いなく、前世で主を崇拝したに違いない。劣悪な息子がもたらす耐えがたい不幸に苦しめられないですむのだから」**

**第４４節**

यतः पापीयसी कीर्तिरधर्मः महान्नृणाम् ।
यतो विरोधः सर्वेषां यत आधिरनन्तकः ॥ ४४ ॥

ヤタハ　パーピーヤシー　キールティル
*yataḥ pāpīyasī kīrtir*

アダハルマシュ　チャ　マハーン　ヌリナームム
*adharmaś ca mahān nṛṇām*

ヤトー　ヴィローダハハ　サルヴェーシャームム
*yato virodhaḥ sarveṣām*

ヤタ　アーデヒィル　アナンタカハ
*yata ādhir anantakaḥ*

*yataḥ*—劣悪な息子のために; *pāpīyasī*—罪深い; *kīrtiḥ*—名声; *adharmaḥ*—反宗教; *ca*—もまた; *mahān*—偉大な; *nṛṇām*—人物たちの; *yataḥ*—〜であるものから; *virodhaḥ*—争い; *sarveṣām*—あらゆる人々の; *yataḥ*—〜であるものから; *ādhiḥ*—不安; *anantakaḥ*—終わりのない。

**罪深い息子は人の名声を消滅させる。家庭におけるその息子の反宗教的おこないが、人々のあいだに無宗教と争いを巻きおこし、やがて終わりなき不安へと駆りたてていく。**

**要旨解説**

結婚した二人には息子が必要であり、さもなければ二人の家族生活は空虚なものになる、と言われています。しかし、優れた質をもたずに生まれた子は、見る力のない目を持っているのと同じです。そのような目は見ることでは役にたちませんし、耐えられないほどの苦痛を与えます。だからこそアンガ王は、そのような劣悪な息子をさずかった自分の不運を嘆いているのです。

## 第４５節

कस्तं प्रजापदेशं वै मोहबन्धनमात्मनः ।
पण्डितो बहु मन्येत यदर्थाः क्लेशदा गृहाः ॥ ४५ ॥

カス　タンム　プラジャーパデーシャンム　ヴァイ
*kas taṁ prajāpadeśaṁ vai*

モーハ・バンダハナンム　アートゥマナハ
*moha-bandhanam ātmanaḥ*

パンディトー　バフ　マニェータ
*paṇḍito bahu manyeta*

ヤドゥ・アルタハーハ　クレーシャダー　グリハーハ
*yad-arthāḥ kleśadā gṛhāḥ*

*kaḥ*—だれが; *tam*—彼を; *prajā-apadeśam*—名前だけの息子; *vai*—確かに; *moha*—幻想の; *bandhanam*—束縛; *ātmanaḥ*—魂にとって; *paṇḍitaḥ*—知性ある者; *bahu manyeta*—評価するだろう; *yat-arthāḥ*—～の者が理由で; *kleśa-dāḥ*—苦しい; *gṛhāḥ*—家庭。

**理解力と知性を持つ人物がそのような無価値の子を望むだろうか。そのような子は生命体にとって幻想の束縛にすぎず、家庭を不幸におとしいれる存在でもある。**

## 第４６節

कदपत्यं वरं मन्ये सदपत्याच्छुचां पदात् ।
निर्विद्येत गृहान्मर्त्यो यत्क्लेशनिवहा गृहाः ॥ ४६ ॥

カドゥ・アパテャンム　ヴァランム　マニェー
*kad-apatyaṁ varaṁ manye*

サドゥ・アパテャーチ　チュチャーンム　パダートゥ
*sad-apatyāc chucāṁ padāt*

ニルヴィデェータ　グリハーン　マルテョー
*nirvidyeta gṛhān martyo*

ヤトゥ・クレーシャ・ニヴァハー　グリハーハ
*yat-kleśa-nivahā gṛhāḥ*

*kad-apatyam*—劣悪な息子; *varam*—より良い; *manye*—私は考える; *sat-apatyāt*—優れた息子よりも; *śucām*—悲しみの; *padāt*—源; *nirvidyeta*—無執着になる; *gṛhāt*—家庭から; *martyaḥ*—死すべき人間; *yat*—～である者のために; *kleśa-nivahāḥ*—地獄のような; *gṛhāḥ*—家庭。

**そして王は考えた。「良い息子よりも悪い息子のほうがいい。なぜなら、良い息子は家庭に対する執着心を強くするが、悪い息子ではそうならない。悪い息子は地獄のような家庭を作りだすが、賢い人物ならそのような状態からたやすく、そして自然に無執着になることができる」**

### 要旨解説

アンガ王は、物質的な家庭に対する執着と無執着という視点で状況を見つめています。プラフラーダ・マハーラージャの教えでは、物質的な家庭は草に隠された井戸にたとえられています。そのような井戸に転落した人にとって、そこからはいあがって、ふたたび生活を始めることはほとんどできません。プラフラーダ・マハーラージャは、家庭生活という隠れた井戸をできるだけ早く捨てて、最高人格主神に身をゆだねるために森に行くよう勧めています。ヴェーダ文化では、ヴァーナプラスタとサンニャーシーがこのように家庭を放棄することは不可欠だとされています。しかし、人々は家庭に心が囚われていますから、死ぬ直前まで家庭生活から離れようとしません。ですからアンガ王は、無執着という視点から、劣悪な子をさずかるのは家庭生活からの無執着という好都合な刺激である、と考えました。そして、自分の劣悪な息子を友人と考えました、家庭から無執着になるよう助けてくれたからです。結局私たちは、物質生活から無執着になる方法を学ばなくてはなりません。ですから、もし劣悪な息子が、その邪悪な行動によって世帯者を家庭から離れるよう助けているのであれば、それは恩恵だと言えます。

### 第４７節

एवं स निर्विण्णमना नृपो गृहा-
　　न्निशीथ उत्थाय महोदयोदयात् ।
अलब्धनिद्रोऽनुपलक्षितो नृभि-
　　र्हित्वा गतो वेनसुवं प्रसुप्ताम् ॥ ४७ ॥

エーヴァンム　サ　ニルヴィンナ・マナー　ヌリポー　グリハーン
*evaṁ sa nirviṇṇa-manā nṛpo gṛhān*

ニシータハ　ウッタハーヤ　マホーダヨーダヤートゥ
*niśītha utthāya mahodayodayāt*

アァブダハ・ニドゥロー　ヌパラクシトー　ヌリビェル
*alabdha-nidro 'nupalakṣito nṛbhir*

ヒトゥヴァー　ガトー　ヴェーナ・スヴァンム　プラスプターンム
*hitvā gato vena-suvaṁ prasuptām*

*evam*—こうして; *saḥ*—彼; *nirviṇṇa-manāḥ*—心の中で無関心になって; *nṛpaḥ*—アンガ王; *gṛhāt*—家庭から; *niśīthe*—真夜中に; *utthāya*—起き上がって; *mahā-udaya-udayāt*—偉大な魂たちによる祝福で裕福な; *alabdha-nidraḥ*—眠ることなく; *anupalakṣitaḥ*—見られることなく; *nṛbhiḥ*—一般人によって; *hitvā*—捨て去って; *gataḥ*—離れた; *vena-suvam*—ヴェーナの母親; *prasuptām*—熟睡している。

**そのように考え、アンガ王は夜一睡もすることができなかった。そしてその心は世帯者の生活に完全に無関心になっていた。そしてある夜、寝台から起きあがると、熟睡していたヴェーナの母（自分の妻）のもとを去っていった。きわめて豊かな王国への魅力をすべて捨てさり、だれにも見られることなく、ひとり静かに宮殿と富をあとに、森に向かって進んでいった。**

### 要旨解説

この節にある*mahodayodayāt*（マホーダヨーダヤートゥ）ということばは、偉大な魂の祝福によって物質的な富にめぐまれる、という意味がありますが、そのような物質的富への執着を捨てるとき、それは偉大な魂たちからのさらにすばらしい恩恵と考えることができます。王にとって、裕福な王国や、若くて誠実な妻を放棄することはたやすくできるものではなかったものの、その執着を捨てて、だれにも見られることなく森に行くことができたのは、最高人格主神からのすばらしい恩恵であることにまちがいありません。家庭、妻、財産への執着を捨てて、真夜中に家を去っていく偉大な魂の例は数多く残されています。

### 第４８節

विज्ञाय निर्विꣳ गतं पतिं प्रजाः
पुरोहितामात्यसुहृद्गणादयः ।
विचिक्युरुर्व्यामतिशोककातरा
यथा निगूढं पुरुषं कुयोगिनः ॥ ४८ ॥

ヴィギャーヤ　ニルヴィデャ　ガタンム　パティンム　プラジャーハ
*vijñāya nirvidya gataṁ patiṁ prajāḥ*

プローヒターマーテャ・スフリドゥ・ガナーダヤハ
*purohitāmātya-suhṛd-gaṇādayaḥ*

ヴィチキュル　ウルヴャーンム　アティショーカ・カータラー
*vicikyur urvyām atiśoka-kātarā*

ヤタハー　ニグーダハンム　プルシャンム　クヨーギナハ
*yathā nigūḍhaṁ puruṣaṁ kuyoginaḥ*

*vijñāya*—理解したあと; *nirvidya*—無関心で; *gatam*—去っていった; *patim*—王; *prajāḥ*—市民達すべて; *purohita*—僧侶達; *āmātya*—大臣達; *suhṛt*—友人達; *gaṇa-ādayaḥ*—そして一般人達; *vicikyuḥ*—探した; *urvyām*—地上で; *ati-śoka-kātarāḥ*—非常に悲しんで; *yathā*—〜であるように; *nigūḍham*—隠れた; *puruṣam*—至高の魂; *ku-yoginaḥ*—未熟な神秘家。

**王が家庭に無頓着になり、国を去ったことを知った市民たち、僧侶たち、大臣たち、友人たち、一般人たちはひじょうに悲しんだ。そして世界中をくまなく探しはじめた、未熟な神秘家が自分の内にいる至高の魂を探しもとめるように。**

### 要旨解説

知性の低い神秘家が心のうちに至高の魂を探そうとする例には、すぐれた教えが含まれています。絶対真理者は、ブラフマン、局所的パラマートマー、最高人格主神という３つの様相として悟られます。知性の劣る神秘家*kuyoginaḥ*（クヨーギナハ）は、心を使った推論で非人格のブラフマンの境地まで辿りつくことができますが、すべての生命体の内にいる至高の魂を見つけることはできません。王が国を去ったあと、もちろんどこかにいることは確実だったのですが、市民たちは、知性の劣る神秘家のように、王を見つけだすすべを知らなかったため、途方にくれるばかりでした。

### 第４９節

अलक्षयन्तः पदवीं प्रजापते-
र्हतोऽमाः प्रत्युपसृत्य ते पुरीम् ।
ऋषीन् समेतानभिवन्ऽ साश्रवो
न्यवेदयन् पौरव भर्तृविप्लवम् ॥ ४९ ॥

ラクシャヤンタハ　パダヴィーンム　プラジャーパテール
*alakṣayantaḥ padavīṁ prajāpater*

ハトーデャマーハ　プラテュパスリテャ　テー　プリーンム
*hatodyamāḥ pratyupasṛtya te purīm*

リシーン　サメーターン　アビヒヴァンデャ　サーシュラヴォー
*ṛṣīn sametān abhivandya sāśravo*

ニャヴェーダヤン　パウラヴァ　バハルトゥリ・ヴィプラヴァンム
*nyavedayan paurava bhartṛ-viplavam*

*alakṣayantaḥ*—発見していない; *padavīm*—まったく足取りがつかめない; *prajāpateḥ*—アンガ王の; *hata-udyamāḥ*—落胆して; *pratyupasṛtya*—戻った後; *te*—その市民達; *purīm*—その都市に; *ṛṣīn*—偉大な聖者達; *sametān*—集まって; *abhivandya*—尊敬の礼を表した後; *sa-aśravaḥ*—目に涙を浮かべて; *nyavedayan*—知らせた; *pauravа*—ヴィドゥラよ; *bhartṛ*—王の; *viplavam*—不在。

**市民たちはあらゆる場所を捜しまわったあげく、王の足取りがまったくつかめないことに落胆し、王がいなくなったことで国中の偉大な聖者たちが集まっていた都にもどった。目に涙を浮かべ、聖者たちに尊敬の礼を払うと、どこにも王を見つけることができなかった経過をつぶさに報告した。**

*これで、バクティヴェーダンタによる『シュリーマド・バーガヴァタム』、第４編・第13章、「ドゥルヴァ・マハーラージャの子孫の説明」の要旨解説を終了します。*